

法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第６８回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

****

**優しさを感じる社会へ**

京都・片岡　環

　皆さんは，「子ども食堂」という言葉を聞いたことがありますか？それについて何か知っていることはありますか？聞いたことはあっても、どういうものかよく知らない人もいるかもしれません。「子どもが食堂で働いている…？」と思う人もいるかもしれません。私も、初めて聞いた時はそうでした。

　この言葉は、普段何気なく見ていたニュースで知りました。かなり前のことですが、とても強く印象に残っています。そのニュースは、私に「無償の優しさ」について考えさせるきっかけとなりました。

　「子ども食堂」は、子どもが一人でも利用でき、無料または安い値段で食事ができる場所です。貧困家庭の子どもだけではなく、ご飯を一緒に食べる人がいない「孤食」、いつも同じものを食べる「固食」、一種類しか食べるものがない「個食」をしている子どもなども対象になります。そう聞くと、なんとなく暗い印象を持つかもしれませんが、テレビの中の子どもたちは，みんな笑顔で，本当に楽しそうに食事をしていました。

　この活動を支えているのは、主に地域のボランティア団体です。最初、この活動について知った時、運営しているのは民間の会社だと思っていました。なので、運営の大部分がボランティアによるものだと知り驚きました。それと同時に、疑問を持ちました。「なぜ，利益もないのに活動するのだろう」。

　その答えは、テレビの中にありました。ボランティアの人は、子どもたちがご飯を食べるのをすごく嬉しそうに見ていたのです。見返りなどを求めず、ただ、子どもたちが元気に育ってほしいという一心で活動しているのだと強く伝わりました。目に見えた利益はなくても、「無償の優しさ」が、ボランティアの人のやりがいや幸福感につながっていたのです。

　日常にある「無償の優しさ」は、皆さんが思っている以上にたくさんあると思います。

　私は祖父母とも一緒に暮らしていて、主に祖母がご飯を作ってくれます。家にはいつも誰かがいて、毎日三食しっかり食べられる。このニュースを見るまで、その幸せさに気がつきませんでした。そして、何も見返りを求めず、今まで自分を育ててくれた家族に感謝するようになりました。

　今の社会では、「無償の優しさ」がなくなってきているように思います。誰かが見ていなくても、「ちょっとしたボランティア」をできる人が少なくなってきている，と学校生活や日常生活の中で感じています。そして、子ども食堂のボランティアの数なども減ってきているそうです。

　この問題は、私たちにとってあまり身近ではないかもしれません。でも、「無償の優しさ」を注ぎ、食事を作ってくれたり、育ててくれたりする家族に感謝することはできませんか？一日一回でも、家族や友達や先生に、「ありがとう」

と感謝の気持ちを伝えることはできませんか？皆さんがそのような行動を積み重ねていくことで、皆さん自身の中にある、「無償の優しさ」にもつながると思います。

　そして私は、子ども食堂のボランティアの人のような、家族以外にも「無償の優しさ」を注いでくれる人が身近にいると考えました。

　私の家の近くに図書館があります。といっても、それは近所のおばちゃんが自宅で開いている、小さな図書館です。毎週土曜日になると、近所の子どもたちがそこへ集まって、本を読んだりお菓子を食べたりと自由に過ごします。私も小学校低学年の頃はよく通っていて、たくさんの本を読んでいました。おばちゃんはよく、「ここへ来たみんなの楽しそうな顔を見る時が一番嬉しくなる」

と言っていました。その言葉は、おばちゃんの、「たくさん本を読んでたくさん学んでほしい」という、自分の利益を求めない、温かくまっすぐな優しさを感じました。子ども食堂とは少し違いますが、同じように「無償の優しさ」を注いでくれる身近な場所なのだと思いました。気がつかないだけで、皆さんの周りにもそのような場所があるはずです。

　皆さんに知っていてほしいのは、身近に、自分の利益のために行動するのではなく、誰かの笑顔のために行動する人がいるということです。見返りを求めず、「無償の優しさ」を注いでくれる人がいるということです。そして、私たちがそのような行動をとれるようになれば、もっと温かく、明るい社会になると思います。一人一人が少し意識するだけで、この社会はもっと変われるはずです。優しさを感じる、温もりに満ちた社会への第一歩を踏み出してみませんか。